

巻頭言

『聖書・伝統・理性、そして経験』の豊かさを生きる

林 牧 人

2016年10月、ルーテル世界連盟（LWF）発祥の地ルンドにおいて、ローマ教皇フランシスコを迎えて行われたローマ・カトリック教会とLWFとの合同礼拝をもって始められた「宗教改革500年」の節目を覚える時は、2017年10月31日の宗教改革記念日を迎えてもなお、関連諸行事が引き続き行われている。この1年あまりの間、もう見飽きたと思わせるほどに、マルティン・ルターの肖像を至る所で目にしてきた。しかし、日本の諸教会、とりわけ福音主義（プロテスタント）諸教会において「宗教改革500年」の節目を覚えることは、ルター派諸教会とローマ・カトリック教会における盛り上がりには比して、どことなく低調であったとは言えないだろうか。

あるところで、宗教改革500年に関連づけて「宗教改革とわたしたちの信仰」をテーマに、メソジスト・ヘリテージを受け継ぐ立場から書くように依頼され、その冒頭、以下のように記した。

『宗教改革500年の節目を迎え、日本基督教団においても記念行事や出版が計画されている。しかし、今ひとつ自覚的に受け止められていないように感じている。無理もない、日本の福音主義（プロテスタント）諸教会のルーツの大半は、北米の教派教会にある。中でも教団に流れ込んでいる多くの諸教派の伝統は、少なくともルター派のように直接的に1517年の出来事に結びつくわけではない。教団は、ルター派ではないと

いう限りにおいて（残留したルーテル教会と教職が極少数あったことは承知の上でなお）改革派「的」な合同教会であることは否定し得ない。その中に、メソジスト教会の伝統も位置づけられることとなる』。

この投稿の「メソジストはプロテスタントか～教団形成にその特質を生かす道筋を求めて～」との表題について、若干のとまどいを覚える方々もあったようであるが、その終わりには次のように記した。

『ジョン・ウェスレーの教会観は「初代教会への憧憬とその回復」（職制と教権の連続性を中心に）にあり、メソジストはこれを受け継いでいる。国教会をひな形に据えつつ、なお足りぬところを補うことが主眼となるが故に「体制内改革」の道をとるのである。改革の中身は「教会共同体」を場とする「恵みの手段」における神体験の重視、ことに、聖餐における「リアルプレゼンス」と「犠牲理解」の徹底（ノックスがブラック・ルブリックによって無効化したところの回復）。「行動を伴わない」実存体験や形式主義を忌避する等があげられる。これらが踏まえられているならば、「予定論」は「意見」の一つに過ぎないとも言う。メソジズムで「予定論」が問題となり、アルミニアン（厳密な意味で用いていない）であると主張されるのは、倫理的実践を阻む理屈として用いられるからである。

これらは、いわゆる「信仰告白」的（教義）的一致ではなく（特定の教義を定義したり主張したりしない）、「標準説教」、「聖書注解」、「祈祷書」による緩やかな共同体形成という特質を生み出す。「アングリカニズムの特質は、『聖書・伝統・理性』という分散された権威の源泉を置くことにある」（西原廉太）。これは「聖書のみ」だけではなく、「古典信条」、「職制（エписコペー、教権の所在）」によって一致するという特質として、メソジズムが受け継いでいるものである。メソジズムが保持するアングリカニズム的な教会的特質とピューリタニズムの特質との関係で言えば、プロテスタントという括りに包含しきれない現実がここに存在するとは言えまいか。これは、時代を超えて、ウェスレーによるオクスフォード運動への影響として、アングロ・カトリックとメソジストの共鳴現象を引き起こし、ついには、ニューマンを通して、

ローマ・カトリックの第2ヴァチカン公会議へと至る流れにつながるのである』。

ジョン・ウェスレーとメソジストの信仰的特質と宗教改革、とりわけルターとの関連が論じられるときに、引き合いに出されるのは、言うまでもなく「アルダスゲイト回心」の出来事である。ウェスレーの福音主義的回心として知られ、今なお、全世界の「メソジストと呼ばれる人々」によって記念されているこの出来事は、1738年5月24日、ロンドンのアルダスゲイト街におけるモラヴィア派の集会に於いて引き起こされたとされている。2018年は「アルダスゲイト回心280年」の節目の年であることを想い起こしたい。

ジョン・ウェスレーは、ルターの『ロマ書序文』の朗読を聴いているときに、「心あやしく燃ゆる」体験と共に信仰義認の確証へと導かれたのであるが、これを持ってして、ウェスレーとその後続くメソジスト運動を、ルターに直接結びつく「福音主義」と定義づけるのはいささか無理があると言わざるを得ないであろう。ウェスレーは英国教会を通してルターの遺産を受け継いでいたが、福音主義的回心そのものは、ルター派あるいはルター自身を通してではなく、モラヴィア派を通してであったということに注目したい。モラヴィア派は、ヘルンフォートのツィンツェンドルフ伯の下に保護されていた、いわば主流派からこぼれ落ちた諸グループによってなっている共同体である。藤本満氏は、近著『歴史～シリーズ わたしたちと宗教改革～第1巻』（日本基督教団出版局）において、宗教改革の「主流」としてのルター派、改革派に並行して存在した、主流派からこぼれ落ちた「傍流」の存在に着目し、それが、ウェスレーを通してメソジスト教会に流れ込んでいると指摘する。ウェスレーに端を発するメソジストの諸伝統は、英国教会のみならず、「傍流」を通してもまた、宗教改革に結びつくのである。

元来、宗教改革について論じられる際は、ルター派中心のドイツ、改革派中心のスイスという2本柱が枠組みとして提示され、それぞれの影響を受けたところでの二次的な展開としての英国という理解が大勢を占めていたと言ってもよいだろう。しかし、宗教改革は、ルターから全てが発した訳ではない。フスやウィクリフに代表される前史とその後の「傍流」としての独自の展開が

ある。英国宗教改革も、大陸のそれを承けたという点はあるが、祈祷書の主要な構成要素としてのセーラム典礼をはじめとして、それ以前からの「非ローマ」的展開に由来することもある。つまり、時期を同じくして、同時多発的に改革運動という形で具体化していったことに他ならない。

それゆえ、ウェスレーとメソジスト教会について正しく受け止めるには、ルター派、改革派と並んで、英国宗教改革を3本目の柱として並行して論じる枠組みが必要とされるだろう。藤本氏の著作は、この点を明確に提示した上で、ドイツとスイスに類する紙幅を割いて英国宗教改革について論じていることは、刮目に値する。そのことを踏まえた上で、さらに、英国教会の「非ローマ化」を目指す傾向から発し、盛んな教父研究とリタジーを通して、西方教会からすれば異質な東方教会の流れもまた、ウェスレーを通してメソジスト教会に流れ込んでいる点も見逃せない。ここには、ウェスレー自身の東方教会との直接的な出会いも含まれる。ことに、義認、新生、聖化、そして栄化というところにまで及ぶ、「聖霊の宮」となるべき「人間のふさわしさの回復」として一直線に貫かれる救いの理解に、東方教会の影響を見る。ウェスレーにおいては、さらに個々人のキリスト者の救いを超えて、被造物とその世界にまで及ぶ「新しい創造」というヴィジョンが提示に至るのである。

この1年「宗教改革500年」の節目を覚える一方で、米国における合同メソジスト教会と米国聖公会のフルコミュニオン相互承認に向けた決議、英国における英国メソジスト教会と英国教会の合同を前進させる英国教会シノッドの決議と、相次いで、アングリカン（エписコパル）＝メソジストという枠組みを浮かび上がらせる出来事が続いた。これらは、第3の枠組みとしての英国宗教改革の独自性とその特質をもあらためて明確に指し示すものであろう。アングリカン・コミュニオンに連なる人々が約8500万人、世界メソジスト協議会に連なる人々が約8000万人と言われている。合わせれば、1億6000万人を超える一大勢力である。メソジストの回りには、さらにウェスレーン系の諸教会も控えている。このことは、今後のキリスト教会の歩みを見通す際には無視できない要素としてある。

しかし、日本においては（メソジスト・ヘリテージを自覚的に受け継ぐ日本基督教団更新伝道会が組織されているといえども）メソジスト教会が

教派教会としては存在せず、合同教会の一員であるばかりか、カナダやオーストラリアの合同教会とは違い、世界メソジスト協議会のメンバーとはなっておらず、日本聖公会の側からすると、アングリカン＝メソジストの枠組みで公式に対話すべき相手が存在しない状況で、双方共に「枠組み」を理解することが困難な現実がある。またウェスレアン系諸教会との関係においても、対話の軸となるべきメソジスト教会の不在によって、結集しがたい現実もあるのではないだろうか。

この現状のただ中で、日本ウェスレー・メソジスト学会が組織されていることは、大いなる希望である。結成当初から、自覚的に、いわゆるメインラインのメソジストに属する者とウェスレアン系に属する者との出会いと交わり、共同研鑽の場として形成されて来たことをあらためて思い起こしたい。そこから広く、今後の日本における福音宣教の具体化のために、『聖書、伝統、理性、そして経験』を生きる群の強力な枠組みづくりのきっかけとなることが出来ればと願っている。学会に連なる人々の多くの賜物が生かされ、「宗教改革 500 年」の時を終えて「アルダスゲイト 280 年」の節目へと歩みを進めることとしたい。

(日本基督教団西新井教会 主任牧師、附属 西新井教会保育園 園長)